

道標

メイド・イン・ジャパン?

川田 篤
弁護士・弁理士



駆け出しの弁護士のころ、お金をため、ドイツの大学に留学しました。ちょうど世紀末のころです。学生寮に入ると、いろいろな国の学生がいました。共用の台所では、ナイジェリア人医学生が強烈な匂いの料理をしています。ドイツ人神学生が臭いといつと、医学生は、とても良い匂いだと言いつ返します。世話好きのインド人経済学部生は強烈な巻き舌のドイツ語。最

初は聞きづらひ感じましたが、不思議なもので、そのうち慣れました。

中国人学生も同じ寮にいました。上海の男子学生が鍵を友人に預けて部屋に入れないというので、しばしば自分の部屋に招いてお茶を入れました。そうすると、どうして日本人なのに自分に親切にするのかと聞いてくるのです。

そして、上海の学校では、南京で日本軍の兵士に殺害された中国人の数を覚えさせられ、その人数は何人かという問題が試験でも出されたといつのです。中国では、どうも「鬼畜米英」ならぬ「鬼畜日本」的な教育がされているといつ、日本人が親切にすることが不思議に映るよつでした。その寮には、中国人女子学生もいました。こん

にはといつと無視されました。中国では誇張された反日教育が正当化され、日常化しているのかもしれない。

その当時、我が国では、中国製を並べた百円ショップなるものが出現したり、中国で大量生産した安い衣料品のチェーン店が勢力を拡大し始めたつていました。しかし、中国脅威論は、それほど聞かれませんでした。戦略的互恵などという方もおられました。ただ、国際政治はそんなに甘いものだらうかと、寮にいた中国人学生たちの顔を思い浮かべました。

その後、中国製の安売りの衣料品店の経営者は、今や世界の長者番付に載るほどです。しかし、その裏では、我が国の各地の繊維産業の人が収入を減らしたり、

ふるさと伝言

廃業したりしたよつです。経済産業省の統計をみると、今世紀に入り、我が国の繊維工業の事業者数は半減、従業者数も半減しています。愛媛の方には、今治のタオル産業の苦心ぶりを見れば、統計を持ち出すまでもないでしょう。

自由競争、自由貿易で、より良い物がより安く買えれば、消費者の利益だといつ経済学者もいます。しかし、為替相場などは素人目にも自由な市場原理以外の「何か」に左右されているよつな気がします。それに、働いたことがなく、消費だけをしている人はまれです。失職すれば、お金がなくなつり、たとえ半値でも物を買ひよつがありません。

お店屋さんの衣料品売場などで

品物を見ていると、同じ値段なら中国製が勝ることが少なくないよつな感じもします。品物や値段を表面的に見比べれば、中国製を購入するのでも当然なのかもしれない。最近では中国製しか置かれていないものもあります。ただ、そうして日本製より中国製のものを選択するつちに、我が国の各地の産業は衰退していくのかもしれない。

他方、中国が得た利益が民生ではなく軍備拡張に使われるよつでは、いよいよ緊張が高まり、新たな戦争の火種にすらなりかねません。憲法を尊重し平和を愛する国民であれば、今治のタオル、半額の中国製のタオル、どちらを選ぶか、よく考えるべきではないでしょうか。

(かわだ・あつし、本籍伊予市)